2024 年 6 月 19 日（水）一橋大学構内で眼にした植物
―ヤブカンゾウとノカンゾウ―

6 月に入り、今年の梅雨は例年より遅いなという思いでいましたが、暑さも厳しさを増す中、漸く梅雨時を感ずることができるくらいの雨量と天気の変化を感じることができるようになりました。そんな中、学内の数多くの野草類や樹木も「わが世を得たり」といわんばかりに、勢いよく生長、繁茂し、いよいよ私達、一橋植樹会の活動も正念場を迎えます。このような状況下、昨日も学内に存在する 500 本弱の胸高幹周 2 メートルを超える大径木の健康調査を実施しました。その中でふと眼にした身近な植物を紹介します。

その植物はヤブカンゾウとノカンゾウです。ともに嘗ては「ユリ科」に分類されていましたが、遺伝子分類（APG 分類体系）により、ツルボラン科ワスレナグサ属に分類変更されている多年草です。わかりにくい分類の変更ですので、嘗て親しんだユリ科の分類方法で接してみるのが良いかと思います。ともに明るいオレンジ色の花をつけます。例年に比べ、気候のせいか今年は花期が早いようで、7 月を前にした6月の 20 日過ぎの今頃でもその花を眼にすることができました。

どちらの植物も、学内で少し注意を払えば普通に眼にすることができますが、ヤブカンゾウのほうが多いように思います。この二つの植物は、花が咲かないとじつに見分けが難しい植物で、花を見ることのできる今の時期がそれを知る適期ということができます。八重咲きのものがヤブカンゾウで、ノカンゾウは一重です。皆さんが良くご存知のニッコウキスゲや嘗ては多摩地域にも広く生育していて、今では府中市の浅間山などにのみその姿を見ることのできるムサシノキスゲもその仲間です。[*写真：花がないのでノカンゾウかヤブカンゾウかわからない出芽・出葉の頃、学外、八王子市恩方町で*]

なお、ヤブカンゾウ、ノカンゾウも「カンゾウ」は漢字では「萱草」と表記されます。一方、漢方生薬として有名なカンゾウ（甘草）は、日本に自生のない全く異なるマメ科の植物であることにご留意下さい。

1．ヤブカンゾウ

在来種で北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島に自生しています。若葉は食用になり、丈夫で育てやすく、庭にもよく植えられている植物です。染色体が 3 倍体であることから不稔性で、種子はできません。ヤブカンゾウは日本では中国原産といわれ、中国では日本、朝鮮が原産ではないかといわれていますが、中国には自生せず、母種のホンカンゾウが自生するのみです。根は丸い塊がいくつも連なったような形の球根で、葉は長さ 40～60 ㎝、幅 2～5 ㎝。花は直径約 8 ㎝で雄蘂と雌蘂が花弁化して、八重になっているのが特徴です。

根を干したものが萱草根という生薬になり、利尿、消炎、止血、膀胱炎、不眠症に用いられています。中国では「忘憂草」とも呼ばれることがあり、服用すると憂鬱なことを忘れさせてくれる作用があるということのようです。

毎年３月末から 4 月にかけて、ヤブカンゾウは新芽・新葉を出します。学内においても例外ではありません。葉は軟らかく、苦みや香りもほとんど気にならず、殊に根元に近い部分は少し甘い上品な味をしていて、生で食べてもそのことが良くわかります。薄めの塩水で 1～2 分ほどゆでて、味噌、塩、マヨネーズなどで和えるだけで食べることができます。シャキシャキとした歯ごたえで若干の甘みもあり美味しいく食べることが出来ます。私はヤブカンゾウ（ノカンゾウ）の新芽・新葉を採取するとおひたしにして食べます。蕾は食べたことはありませんが、中華料理では、ノカンゾウもそうですが、金針菜という高級食材として、野菜感覚で炒め物やスープなどに使われているとのことです。

栄養素としては、タンパク質、ミネラル類、ビタミン B や C、カロテン、アミノ酸のアスパラギン酸などがバランスよく含まれ、とくに鉄分は豊富で、ホウレンソウの 20 倍も含まれているとのことです。花も茹でたり、炒め物や揚げ物にしたりして、おいしく食べることができるとのことです。試してみたいですね。[*写真：ヤブカンゾウ、フィールドホッケー場東*]

2. ノカンゾウ

ヤブカンゾウのところで記した内容と概ね同じです。日本、朝鮮に自生し、中国のものは栽培品といわれています。原野や川の土手などに生育する多年草です。花が八重のヤブカンゾウより全体に小型で、やや湿った場所を好むといわれていますが、生育場所については必ずしももそうではないようです。葉は幅 1～1.5 ㎝。花は一重咲きで花被片は通常 6 枚（まれに 5,7,8 枚）でオレンジ色です。色味には個体差があり、黄色の強いものから赤色、褐色寄りのものまでみられ、紅赤色の強いものはベニカンゾウと称される場合もあります。結実率は高くはないものの、一部が結実して黒色で光沢のある種子を産します。

八重咲きで結実しないヤブカンゾウも似たような場所で見見ることができます。人里ではヤブカンゾウの方が多いようで、東京都など一部の地方自治体ではノカンゾウに絶滅危惧種のランク付けをしているところもあります。

嘗ての分類体系である新エングラー体系では「ユリ科」として長年知られてきましたが、その後提唱された遺伝子を基礎にした新しい分類体系、APG 分類体系ではワスレグサ科、ススキノキ科と変遷し、現在最新の APG I 版ではツルボラン科に属しています。ヤブカンゾウについても話をしましたが同じですね。[*写真：ノカンゾウ、矢野二郎先生銅像西側、イチョウの巨木付近*]

一橋植樹会会長
飯塚義則（昭 50 経）